

鄭和とムハンマド・チョンホ —雲南碑文のナゾ—

上田 信

立教大学文学部

鄭和との出会い

2004年から翌05年にかけて、雲南省の省都・昆明に研究で1年間、滞在した。その時に興味を抱いたのが、鄭和である。鄭和は中国の船団を率いて航海をした人物¹⁾として知られているが、生まれは雲南省。昆明から南に少し行った晋寧というところが出身地で、そこには鄭和の父の墓がある。その墓碑の前に立てられていた石碑に刻まれた碑文を見た。その碑文に幾つかのナゾがあったということで、鄭和に関心を持ったのである。

2005年はタイミングよく、鄭和が第1回目の南海遠征に出た年から600周年にあたり、中国各地で鄭和の業績を記念する様々なイベントがあった。鄭和に対する興味はますます深まり、『海と帝国』（講談社）という本に、鄭和を主人公とする1章を書くことになったのである²⁾。

今、歴史学全般が、海に非常に注目している。ここ数年の話ではなく、10年ぐらい前から海への関心が強くなっている。それは海が人の動きを妨げるものではなくて、人の動きを繋いでいく側面が非常に大きいということが指摘され、海の歴史であるとか、環東シナ海、環日本海、つまり東シナ海を取り囲む国々、あるいは日本海を取り囲む国々、の研究が非常に多く行なわれてきた。

立教大学名誉教授の荒野泰典という日本近世史の研究者は、日本の江戸時代は決して鎖国ではない、国を閉ざしていたのではない、という説を唱えた³⁾。鎖国ではない「海禁」、つまり管理貿易体制であったのであって、幕府が管理する形で対外貿易を行っていた、そして、4つの「口」を通じて、アジア、世界と繋がっていたという。

4つの口の一つである長崎はすぐ思いつくであろう。出島にはオランダ商館が置かれ、清朝支配下の中国とも交易を行った。2番目は対馬であり、朝鮮半島の朝鮮王朝を通じて中国に繋がってい

た。3番目は沖縄。薩摩が沖縄、当時の琉球王国を支配したが、琉球はまた清朝にも朝貢して、「日清両属」という関係を維持し、日本は薩摩を通じて、沖縄を経由して中国と繋がっていたことになる。最後の一つの口は、北海道の松前藩がアイヌを通じて、大陸のアムール川流域と交易路を持っていたことが指摘されている。アムール川流域に出先機関があった清朝と交易を行っていたのである。

4つの交易の口があったことを、荒野氏がその研究者人生をかけて挑戦したのが、日本の教科書から「鎖国」という言葉を消すことであった。いま使われている高校の教科書を見ると、「鎖国」という言葉は使われてはいるものの、「いわゆる鎖国」あるいは、カッコつきで『鎖国』という形で登場し、以前のように「日本は江戸時代鎖国をしていた」という言い切り型にはならなくなってきている。

荒野氏が、海の視点からアジアの日本を見る研究をしていたという経緯もあり、立教大学では「海」を研究しようということで、2013年から「21世紀海域学の創生」というプロジェクト、「海域学」を1つの学問として成り立たせようというプロジェクトがスタートしている⁴⁾。このプロジェクトの一環で、鄭和とゆかりのあるインドネシア、スリランカを訪問し、その足跡を確認するとともに、現在、中国以外のアジア諸国で、鄭和がどのように認識されているのかを調査することができた。

鄭和の航海

鄭和は、海洋強国を目指し、「一帯一路」政策を推し進めている中国にとっても、重要なキーパーソンとして焦点が当てられている。7月11日は中国で「航海の日」という記念日になった。

これは鄭和が第1回の遠征に出帆した日とされている。しかし、鄭和という人物が、本当に中国が言う海洋強国のシンボルになりうるのだろうか。私は違うのではないかと考えている。

鄭和が生まれたところは中国・雲南省の晋寧、かつては昆陽と呼ばれた土地である。昆明から車で1時間くらいのところに位置し、滇池という大きな湖を臨む。鄭和の生地にある丘の上に鄭和記念公園という公園が造られ、そこに巨大な鄭和の石像が、滇池の湖面を望むように建立されている。滇池は、水深は非常に浅いものの、古くからここで帆船を使って物資を輸送したり、魚を捕ったりということが行われてきた。鄭和は内地で生まれたが、幼少の頃には、こうした船の行き来を眺めながら育ったのかも知れない。

記念公園の中には鄭和の父親の墓がある。漢民族の墓とはかなり趣が違うムスリムの墓の形態を取っている。ただし、この墓は1980年代に再建されたものである。この墓の前に、高さ1.7メートルほどの墓碑がある。この石碑に刻まれた碑文は、ナゾが深まっていく。

碑文の冒頭を読むと、鄭和の父は、

字はハッジ、姓は馬氏、代々雲南の昆陽の人であった。

という文面で始まる。

ハッジとは何か、イスラームの信者がメッカに巡礼することは、周知のことと思う。メッカに巡礼する巡礼月というのがあり、その月にメッカに行って、一切世俗の物を捨て去って、民族などを超えた形で全員が白い同じ服を着て、決まったルートを礼拝する、こういう礼拝を成し遂げた人が、ハッジと呼ばれる。

鄭和の父は、メッカ巡礼をしたことのある、敬虔なムスリムだということがこの一節から明らかとなる。ところが奇妙なことに、父の墓碑であるにもかかわらず、父さんの本名が書かれていない。これは通常の中国の墓碑では、考えられない。そして鄭和の父の父、鄭和の祖父もハッジであったことが後の方に書かれている。つまり2代に亘って雲南からメッカに巡礼に行ったことになる。メッカ巡礼は、単独ではなくて、親族あるいは地域の仲間と連れ立って出かけて行くものであるから、おそらく鄭和の父と祖父は一緒にメッカに行ったと考えて、間違いはないであろう。

和の父の人柄について碑文は、次のように記す。

公は体格が立派で、風采は凛々としていて威厳があり、己をまげてまでして人に迎合することはなく、人に誤りがあれば面と向かって叱責した。その性格は善良で、貧しい人や身寄りのない者には常に保護し援助し、飽きることがなかった。そのために郷里の人々のなかで、公を長者だと称えない者はいなかった。

和の父は、郷里の雲南で信望を集めた人物であったことになる。

鄭和は少年時代を祖父や父親とともに、雲南で暮らしていた。ところが1381年に明朝の大軍が雲南を攻略したとき、その混乱のなかで鄭和の父は死去した。

和が生まれたころ、雲南にはフビライ＝ハーンの第5子の子孫であるバサラワルミが、中国的称号を梁王として統治し、モンゴル高原に後退した北元と呼応していた。朱元璋は明朝を創建したあと、ほぼ一年おきに使節を派遣して、帰順することを求めている。しかし、バサラワルミは使節を殺害して投降を拒み続けていた。

中国では雲南は辺境とみなされ、中国通史のなかで言及されることは少ない。和とその一族の運命を大きく変えた戦役も、多くの史書で軽く触れられる程度である。しかし、明朝にとって雲南は決して辺境として軽視できる土地ではなかった。遑って1253年にモンゴル帝国皇帝のモンケ＝ハーンは、南宋を滅ぼすためにフビライに命じてまず雲南を押さえた。これは、この西南の地域が、軍事的・地政学的にみて中国攻略の要地であったことを示す。

明朝を建て、北京に拠る元朝をモンゴル高原に押し出した朱元璋にとって、中国を保持するためには、雲南に残るモンゴル勢力を駆逐し、自らの勢力下に収める必要がある。雲南攻略は、朱元璋にとって帝国の総仕上げとも喩えられる一大事業であった。

洪武一四年（1381年）、朱元璋は雲南攻略のために軍隊を動かした。動員された軍隊は、騎兵・歩兵を合わせて30万ともいう。明軍を迎え撃つために、バサラワルミは信頼していたダリマに軍を委ね、迎撃に向かわせた。

場所は白石江、一二月の決戦の朝、深い霧があたりを覆っていた。日が昇るとともに霧が薄く

なったとき、ダリマの眼前に、雲南の人間がこれまで目にしたことのない大軍がその姿を現した。明軍の攻勢のまに雲南側は隊列を乱し、敗走せざるを得なかった。

洪武一五年正月、雲南の中心地であった昆明は、明軍に制圧された。白石江の戦いで精鋭 10 万を失ったバサラワルミは、反撃する機会を逸し、和とその父の郷里に近い普寧州の忽納砦に敗走、そこで追い詰められて、元朝の王であることを示す龍衣を焼き捨て、妻子とともに滇池に身を投げたという（『明史』巻一二四、列伝「把匝剌瓦爾密」）。

雲南に残る伝承に拠れば、まだ明軍が押し寄せる前、バサラワルミは善政を施していた。和の父の事績について碑文は、*非道には妥協せず、弱者を救済することに余念がなかった*と称えている。こうした和の父の性格から、郷里防衛に立ち上がり、明軍に抵抗するという選択をさせたと考えてまず間違いはない。そしてその戦乱のなかで落命した。和がまだ 11 歳頃のときであった。

明朝からみれば反逆者であったが故に、碑文には父の名が刻まれなかったと推測できる。この戦乱のなかで和は明軍に捉えられて去勢され、後に永楽帝となる朱棣に献上されて宦官とされた。

和は宦官とはいえ体格も大きく、軍事的な統率力を備えていた。1399～1402 年に朱棣が第 2 代皇帝に対するクーデターを起こしたときに活躍し、その功績によって「鄭」という姓を与えられた。ここに「鄭和」が歴史上に登場することとなったのである。

この碑文の最後には「永楽三年端陽」、つまり 1405 年の旧暦五月五日と刻まれている。この年の旧暦六月、西暦に換算すると 7 月 11 日、明の第 3 代皇帝、永楽帝の命によって、鄭和の第 1 回の航海が行われた。船団の旗艦は「宝船」と呼ばれ、その長さは 137 m とされている。船舶の専門家からは、これほど巨大な木造船は、技術的には建造することは困難であったとされ、疑問視されている⁵⁾。しかし、当時、世界で最大の船であったということは間違いはない。

鄭和の遠征は 7 回に亘って行われた。第 1 回目～3 回目と、第 4 回目～6 回目で、多少性格が違う。第 7 回目は、永楽帝が死んだ後、永楽帝の孫の皇帝の下で行われた航海であり、別枠と見なす。

1 回目～3 回目と、4 回目～6 回目の違いは、

航海から帰った年から次の航海に出かけていくまでの期間の長さである。前半の 3 回は、帰港したその年のうちに、半年くらいの準備期間を経て次の航海に出ている。モンスーンの風向きが変わったらすぐ出かけていくという形だった。

4 回目以降は、次の航海までに 2 年間を費やしている。準備期間が長い。こういう形で 1 回目から 3 回目と 4 回目以降は、性格が違うことが明らかとなる。

目的地も異なる。1 回目から 3 回目の目的地は、インドのカリカットであった。4 回目以降は、7 回目も含めて、さらに遠いアラビアのホルムズを 1 つの目的地とし、ここを拠点としてメッカや、アフリカ東海岸に分遣隊を派遣している。メッカには鄭和自身は行っていないが、分遣隊が赴いており、鄭和の配下にあったムスリムは、イスラームの聖地を訪ねていた。

東アフリカのモザンビークには、鄭和が連れていった部下が残留し、その子孫がつくった村というのがある。現在では村人は東アジア的な風貌ではないものの、彼らの祖先は鄭和と共にやってきた船乗りであったという伝承がある。中国は鄭和と繋がりのある村ということで、この村の若者に奨学金を出し、中国に留学させるということも行われている。

第 4 回目以降の航海で訪れることとなったインド洋の西部では、古くからペルシアやインドのイスラームの人たちが、主に交易を担っていた。こうした海域での円滑な航海のために、鄭和の遠征には、多くのムスリム、イスラームの信者が参加したと言われている。第 4 回の航海で準備に時間を要した一つの理由は、有能なムスリムの乗組員を確保する時間が必要だったということが挙げられている⁶⁾。

航海の目的

鄭和の南海遠征の目的はそもそも何なのか、これについては歴史研究者が様々な説を唱えている⁷⁾。永楽帝が皇帝になる前に、甥にあたる 2 代目の皇帝に対してクーデターを起こし、南京にいた 2 代目皇帝を追い落として自分自身が 3 代目の皇帝になったという経緯がある。攻め落とした南京の宮殿の焼け跡からは第 2 代皇帝と確認できる死体が発見されず、密かに南洋のほうに逃れたという噂

があったために、この第2代皇帝を捜し出すべく鄭和を遠征させたということが、正史（後の王朝のもとで編纂された公式の歴史）である『明史』に書かれている。また、明朝に政権を奪取されたモンゴル帝国の逆襲を事前に予知するために、情報収集を目的に鄭和を派遣したと唱える学者もいる。これまでの説は、いずれも明朝の皇帝の立場から説明するものであった。しかし、実際に航海を行った鄭和の視点から考えた場合、それらの説とは異なる可能性が見えてくる。

鄭和が遠征に着手した年の2年前、1403年にメッカ巡礼から帰ってきたムスリムが南京に到着する。彼らはインド洋から南シナ海に直接に船で通過することができず、そのために長期間に亘り、タイのアユタヤで足止めになっていたという情報を明朝にもたらしたのである。インド洋と南シナ海とを結ぶ航路は、鄭和の父と祖父が使ったルートである可能性がある。

中国からメッカへの巡礼というと、陸路シルクロードを思い浮かべる方が多いかも知れない。しかし、雲南省の位置を考えると、わざわざ北上して内陸に行くよりも、海に出て、船でメッカに行ったほうが、明らかに楽な旅程である。雲南から海に出るにはいくつかのルートがある。1つは雲南から今のミャンマーを経てベンガル湾に出るルート、もう1つは、雲南から東へ行って、今の福建省に出て、そこから船に乗るルートである。福建からインド洋を経てアラビア方面に行くというのは、元の時代、マルコ＝ポーロが帰るときに辿ったルートでもある。おそらくその頃は海を通して、メッカ方面に行くというルートが盛んに使われており、14世紀の海上交易について記す『島夷誌略⁸⁾』には、雲南から1年ほどでメッカに着くことができる」と書かれている。

ところが14世紀末ごろに、マラッカ海峡を船舶で通過することが困難になった。その結果、インド洋を東に中国を目的地として渡ってきた人たちは、ベンガル湾から陸に上がり、山を越えて、タイの今のバンコクよりちょっと北にあるアユタヤに出て、そこで足止めをくらっていた。そして南京から明朝の使節がやって来たときに、その船に便乗して漸く南京に辿り着くことができたのである。

この情報を得た時に、ムスリムの家で育った鄭

和は「何とかしなくてはいけない、中国にいるムスリムたちが、安心してメッカに巡礼できるようにする必要がある」と考えたのではないか。そして鄭和は、自分の主人である永楽帝を説得した。鄭和は宦官の頂点にたつ役職にあり、皇帝の信任も厚く、常に皇帝の身邊にいた。永楽帝は非常に野心家であったので、鄭和はその野心を煽るような形で、今、海に出ることによって、「陛下の威光が海の世界にも轟きます」と述べたのではないか。鄭和が焚きつけて、南海遠征プロジェクトを皇帝から命令させる、というように事を運んだのではないかと想像されるのである。

当時、ジャワ島にあったマジャパイト王国が衰退し、東王宮と西王宮に別れ内戦になっていた。こうした政治状況のなかで、西王宮勢力を後ろ盾にして、華人の陳祖義を代表者とする勢力がマラッカ海峡の航行権を握り、服属しない船舶の航行を妨害していた。陳祖義は海賊であったと中国側史料にはあるが、単純な海賊というよりは、東南アジアにおける一個の政治勢力であったと考えられる⁹⁾。

こうした政治状況に介入し、メッカ巡礼の船舶が自由に往来できるようにするために、鄭和は航行権をムスリムの華人に管理させようとした。実際に、鄭和は第1回目の航海のときに、マラッカに遠征の基地を置いて、ムスリムを乗せた船が海峡を安全に航行できる状況を作り上げている。

インドネシアにおける鄭和

海域学プロジェクトの一環で、私は2014年3月、ジャワ島で調査を行った。赴いたところは、スマランとスラバヤである。

スマランで訪ねたのが三保洞（現地の言葉ではサンボコン）と呼ばれる処である。今世紀に入ってから、中国風の巨大な建物に改められていた。インドネシアにおける華人は非常に厳しい歴史を持っている。特にスハルトの時代は抑圧されていたため、1990年代までは華人が中国風の大きな建造物を建築するなどの目立った動きを表に出すことは非常に難しかった。今世紀に入ってから、インドネシア政府が、インドネシアにおける華人の宗教的な活動を公認している様子がはっきりと見てとれる。

本堂の下には洞窟があり、きれいに整備されて

いるが、かつては海辺で、その洞窟の奥に泉が湧いていた。そして鄭和の艦隊が着いたときに、病気に犯されていたムスリムの航海士をこの地に残留させた。この航海士は洞窟の水を飲み、アッラーに祈りつつ瞑想を行う内に、病が治ったということが伝えられている。いまは鄭和の像を祭っている足下のところに蓋がしてあり、ここには井戸があって水がこんこんと湧いている、と言われている。

中国的な大きなお堂が建つ前は、地元のイスラームの人たちの信仰の場でもあった。かつてはこの洞窟は、アッラーから言葉を介さずに啓示を直接受けるといったイスラームの神秘主義の信者たちが、この洞窟に籠って瞑想していた場でもあった。そこに現在は中国風の建物が建ったということになる。

スラバヤでは、鄭和を記念するモスクを訪ねることができた。「鄭和清真寺」という扁額が掛けられている。清真寺とは、中国語でモスクを表すが、その下に「MASUJID MUHAMMAD CHENG HOO」とある。CHENG HOO とは、鄭和。ムハンマドとあるのは、雲南の碑文に、鄭和の父の姓は「馬」であると刻まれていることに、根拠が求められたのであろう。「馬」という姓を持っている人の多くはムスリムで、馬というのはムハンマドのムという音に基づくと考えられている。そこから鄭和のムスリムとしての名を、ムハンマドとしたものと推定される。

本堂の脇にはレリーフがあり、ジャワ風ムスリムの鄭和像が描かれている。2005 年以降中国などで、鄭和に関する様々な肖像画、或いは彫像が増えているが、その殆どがいわゆる中国風、中国の宦官として描かれているのに対して、ここで初めてムスリムとしての鄭和のイメージを見ることができたのである。

このムスリムの鄭和を記念するモスクは、2001 年に華人系のハッジが代表となり、元々ここにあったモスクを中国風に変えて、鄭和の航海 600 周年記念に間に合うように、立て替えられたものだという。建築にあたって設立された財団は、「インドネシア・イスラーム・中華・統一」というモットーを掲げている。さらに「非政治、独立、社会刷新」という 3 つの行動指針が立てられている。その「非政治」の説明では、我々に様々な働きか

けがあるかもしれないが、それに対しては常に中立の立場を保つべきだ、とある。

インドネシアと中国という巨大な国家権力の狭間で、インドネシアに住んでいる中国系の華人ムスリムたちが、政治的な思惑に左右されないで、自分たちはバランスを取りながら、中立、非政治を維持していかなければいけないのだという立場が、そこから読み取れるのである。

雲南への里帰り

冒頭で取り上げた雲南の石碑の裏には、次のような文言が刻まれている。

馬氏第二子太監鄭和奉

命於永樂九年十一月二十二日至於

祖家墳塋、祭掃追薦、至閏十二月十二日吉日

乃還記耳

翻訳すると「馬氏の第二子の太監（宦官の長官）の鄭和、皇帝の命を奉じて、永樂九年十一月二十二日に、祖先の墓に詣で、祖先の霊を祭り、墓のまわりを清掃し、追善供養を執り行った。閏十二月十二日吉日となり帰還するにあたり、ここに記すのみ」となるうか。

鄭和本人が父の墓前に詣でた日は、西暦 1411 年 12 月 7 日、そして（南京へ）帰還したとされる日は、1412 年 1 月 25 日となる。鄭和が郷里の雲南に里帰りしたのは、ちょうど第 3 回の航海を終えて、第 4 回の航海の準備をしていた時期に相当する。

第 4 回以降の航海には、『瀛涯勝覧』の著者として知られる馬欽、浙江省出身の郭崇礼など、多くのムスリムが参加するようになった¹⁰⁾。こうしたムスリム社会との接点を求める活動において、和自身がムスリムとして幼少時代を過ごしたということが、有利に働いたと推定される。この点をより明確にするために、和は航海の準備の一環として郷里に戻ったと考えられる。

「故馬氏墓碑銘」碑文にあるように、和の祖父・父は二代にわたってハッジの称号を持ち、メッカに巡礼したムスリムとして尊敬されていたと考えられる。第 4 回目以降の遠征においては、南シナ海域およびインド洋沿海地域に広がるムスリムのネットワークが重要な役割を果たす。プロジェクトの統括者が、イスラームと密接な関係を有することを、ムスリム共同体にアピールすること、こ

れがこの碑文の立てられた理由であったと考えられる。

この石碑は、和の父親の事績を称えるために立てられたものではない。ムスリムと協調しなければ成功が覚束ない遠征への布石として石碑が立てられたのである。そして、和をハッジというメッカ巡礼経験者の孫・息子であることを認定することが、碑文が立てられた意図であった。そのため、父の本名は必要がなかった、ともいえよう。南シナ海とインド洋への遠征は、「鄭和」（明朝皇帝が与えた名前）のもとで行われたのではなく、「ハッジの孫・息子」である和の名前で行われたプロジェクトであった。

石碑の裏に刻まれた題記によれば、和は墓参を果たしたあと 50 日ほど郷里の雲南に留まったのち、出立の直前に墓碑を訪れている。この期間を、彼は漫然と過ごしたとは考えられない。和は郷里で父の記憶を持つムスリムを訪ねて回り、南シナ海域各地の港市を管理できる人材をスカウトしようとしていたのではないだろうか。

明朝の統治下で、和の父が郷里のために尽くしたことを記憶している人々は、少なくなかった筈である。明軍の雲南攻略の最中、和が去勢されたことは、郷里のムスリムたちの間では周知の事柄であった。「かつて私たちの父祖が、メッカへの巡礼のために渡った海に共に向かおう」と、和が語る言葉に共感したムスリムがいたとしても、なんら不思議ではない。こうして南シナ海・インド洋に、雲南出身のムスリムが数多く移り住んだのである。

参考文献

- 1) 宮崎正勝 (1997) 『鄭和の南海大遠征 永楽帝の世界秩序再編』中央公論社〈中公新書〉
上田信 (2013) 『シナ海域蜃気楼王国の興亡』講談社、P91-143 を参照のこと。
なお、拙著は『海と帝国－明清時代』（全集中国の歴史 09）講談社、の鄭和に関する章を、人物の視点から内容を増補し書き下ろしたものである。
- 2) 上田信 (2005) 『海と帝国－明清時代』（全集中国の歴史 09）講談社、P144-156
- 3) 荒野泰典 (2003) 『「鎖国」を見直す』かわさき市民アカデミー出版部、P1-90
- 4) 立教大学アジア地域研究所 (2013) 『21 世紀海域学の創成：研究報告書 1』立教大学。
- 5) 山形欣哉 (2004) 『歴史の海を走る－中国造船技術の航跡（図説 中国文化百華）』農山漁村文化協会（農文協）
- 6) ルイーズ・リヴァーシーズ、君野隆久訳 (1996) 『中国が海を支配したとき 鄭和とその時代』、新書館
- 7) 前掲書、宮崎正勝 (1997) 『鄭和の南海大遠征 永楽帝の世界秩序再編』中央公論社〈中公新書〉
- 8) 元代に南シナ海・インド洋を航海した汪大淵が著した地理書。14 世紀の南洋諸国の情報が記載されている。1350 年頃に完成したとされる。
- 9) 鄭永常 (2011) 『海禁的転折』稲郷出版社（台湾）
- 10) 前掲書、ルイーズ・リヴァーシーズ、君野隆久訳 (1996) 『中国が海を支配したとき 鄭和とその時代』、新書館



写真 1 鄭和記念公園の鄭和像



写真 5 洞窟入り口



写真 2 晋寧「鄭和」公園：鄭和の父の墓



写真 6 洞窟内の三保像と井戸

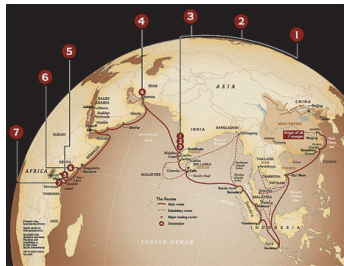


写真 3 鄭和の遠征航路

National Geographic, China's Great Armada, July 2005
<http://ngm.nationalgeographic.com/ngm/0507/feature2/map.html>



写真 7 鄭和記念モスク



写真 4 三保洞（San Poo Kong）



写真 8 ムスリム鄭和のレリーフ

Summary

Zheng He and Muhammad Cheng Hoo

Makoto Ueda

Rikkyo University

Zheng He who navigated the South Sea 600 years ago reincarnated as a political and cultural symbol in the 21st century.

There is a stone monument with an inscription in front of Zheng He's father's tomb on the bank of Zhen lake in Yunnan. According to the inscription, He's father and grandfather were considered to be honored as haaju in the Muslim society.

There was a change in the sea route to the Mecca pilgrimage in the early 15th century. The number of ships coming to the South China Sea passing the Strait of Malacca from the Indian Sea had reduced from around the late 14th century. It was 1403 when the Ming Dynasty found out its reason. It became clear that Muslim merchants crossing the Indian Sea by ship and those people who were returning from Mecca could not pass through the Straits of Malacca. The mission of Zheng He was to eliminate the non-Muslim power and establish the Muslim community.

I had an opportunity to visit the mosque commemorating Zheng He in Surabaya, Indonesia. There is a plaque on which "Masujid Muhammad Cheng Hoo" is written. "Cheng Hoo" means Zheng He. It is written Muhammad because, surname of Zheng He's father was "Ma" and many of the people whose family name is "Ma" are Muslims. "Ma" is said to be based on the transliteration of "Mu" of "Muhammad." This mosque which celebrates the Muslim Zheng He was rebuilt by a Muslim Chinese, Haji, in 2001. At this time, a foundation was established which advocates, "Indonesia-Islam-China-Unity." Furthermore, three-action agenda is put up as "Non-politics, Independence and Social reformation." "Non-politics" refers to that "although there might be several actions towards us Chinese Muslims, we should always keep a neutral stance." In this agenda, we can read between the lines that between two great state powers such as Indonesia and China, Chinese Muslims living in Indonesia should not be influenced by political intentions and should take balance and maintain neutral, non-political state.

I am considering observing how the image of Zheng He of the 15th century will be told in the present 21st century.